

駒場の50年

1949-2000

東京大学総合文化研究科
数理科学研究科
敬養学部

駒場の50年

1949-2000

東京大学総合文化研究科
数理科学研究科
教養学部

[編集] 駒場50年史編集委員会



は し が き

東京大学教養学部は、1949年、旧制の第一高等学校と東京高等学校を母胎として設立され、1999年で創立50周年を迎えた。教養学部の後期課程たる教養学科が学生を迎えて正式に発足したのが1951年だったので、教養学部では1999年から2001年までの3年間に創立50周年記念事業期間と位置付け、様々な企画を実施してきた。この一連の記念事業の重要な一環として企画された本書が、このたび刊行の運びとなったことは、教養学部教職員一同にとって大きな喜びである。

教養学部は30周年の折に『教養学部の三十年 1949-1979』という本を刊行しているので、本書では、それに続く20年間の出来事を中心的に取り上げている。

ただこの20年間の間に、歴史を描く枠組みにも大きな変化があった。それは、1992年の大学院数理科学研究科の発足と、1996年に完成した総合文化研究科の重点化である。これらの動きは、駒場の歴史を「教養学部史」のみでは描きにくい構造をつくりだすことになった。本書は、できるかぎり「駒場の歴史」という包括的な視点をもって、教養学部・大学院総合文化研究科・数理科学研究科の歩みを描こうとしている。

ふりかえると、この20年間は駒場にとって文字どおり激動の時期だった。この激動の中心に位置するのは、1991年におきた、大学設置基準の大綱化という出来事だった。これによって全国の国立大学では教養部解体という事態が広がった。教養教育担当組織を教養部ではなく教養学部としてもっていた東京大学では、この「外圧」がもった意味は他の大学と異なっていたが、もし東京大学教養学部が、学部として発足を認められた先人たちの努力に頼るばかりで、その後の自己革新の努力を怠っていたならば、設置基準大綱化の際に「教養学部解体」という事態を招く可能性（教養学部にとっては危険性だが）はあったと思われる。

このような危険性を回避しえた一つの要因は、1983年に総合文化研究科という自前の大学院研究科をもつようになり、教養学部が先端的な研究と教養教育を結びつける「三層構造」をもつに至っていたということであろう。大学設置基準の大綱化の際に、東京大学教養学部が解体されなかったのは、この大学院総合文化研究科に教養学部のすべての教官をはめ込むことができたからだった（正確に言えば、大学院数理科学研究科を含めて）。大綱化と同時進行で大学院重点化が進んでおり、総合文化研究科の発展な

くしては、大学院研究科レベルでは教養学部の教官はいくつかの研究科に分属せざるをえなくなり、実質上、前期課程教育を担当する教官集団の一体性が失われる危険性があったのである。

しかし、東京大学教養学部は大学院重点化の流れにうまく乗れたからその存在を維持できたとまとめるのは、きわめて一面的であろう。肝心の学部前期課程における教養教育に関して、大胆な改善に乗り出さなければ、大綱化という危機は乗り切れなかった。教養学部は、1993年に従来のもとは大きく変わった新しい前期課程カリキュラムをスタートさせた。この教養教育の変革に関しては、同じく教養学部50周年記念の出版事業として2000年に東京大学出版会から『東京大学は変わる——教養教育のチャレンジ』という本も出されているので本書とあわせて参照されたい。

1990年代の前半と後半では、日本社会における教養教育に対する風向きは大きく変化した。90年代前半には、設置基準大綱化から大部分の国立大学における教養部の解体という事態がおこり、教養教育に対する風当たりはまことに厳しいものだったが、後半になると状況は一変し、いたるところで教養教育の重要性が叫ばれるようになっていく。バブルが崩壊し、日本のこれまでのあり方、そして先行きに対する不安が拡大したことが、教養の必要性の再評価につながったという意味では、これは手放しで喜ぶべきようなことではないのかもしれない。しかし、いずれにせよ、この教養教育に対する風向きの変化に、東京大学教養学部はきわめて主体的にかかわってきたことは間違いなく、この風向きの「好転」にささやかな貢献をしたことを誇ってもよいだろう。

この「教養学部の躍動」は、国際的にも国内的にも、東京大学教養学部に対する注目を増大させることになった。また東京大学内部における教養学部の位置も高まった。東京大学では、大綱化に先立って評議会において、リベラル・アーツ教育の理念に基づく前期課程教育の必要性とそれを教養学部が責任をもって実施することが確認されていた。この全学的な教養教育に対する理解も、教養学部解体という事態が生まれなかった大きな要因だが、90年代の教養学部の自己革新は、こうした全学的な付託に積極的に応えるものだった。1997年に元教養学部長だった蓮實重彦先生が総長に就任されたことを、あまり教養学部に関心を持ってみるのは問題であろうが、この出来事背景には「教養学部の躍動」があったという言い方は許されるのではなかろうか。

さて、大綱化が決められた1991年に、教養学部教授会はある重要な決断をした。それは、手狭になった駒場キャンパスの再開発を促進するために、学生寮は三鷹に統合して大規模な国際学生宿舎を建設し、駒場寮を廃寮にするという方針を打ち出したことである。ここに発生したいわゆる「駒場寮問題」は、本書の刊行準備が最終段階に入った

2001年8月、東京地方裁判所の執行官による強制執行が実施され、旧寮建物の明渡し
が実現するという形で、一応の決着を見ることになった。

50周年記念事業の最終年にあたり、本書の刊行を行われた2001年度という年は、期
せずして駒場にとっては、一つの時代に幕を引く年になったのである。「何十年史」と
いう歴史のまとめかたは、往々にして歴史的な時代区分とはずれるものだが、本書はき
わめて幸いにして、こうした座りの悪さを避けることができた。

いま東京大学教養学部の前には、2004年に実施される可能性のある国立大学の法人
化や、2006年に新しい学習指導要領による高等教育を受けた学生の入学がはじまるこ
となど、新たな荒波が押し寄せようとしている。本書が中心的に扱ったこの20年が
「教養学部の躍動」の時代であったとするならば、これから迎える時代はどのような時
代なのだろうか。これを予測することは容易ではないし、そもそも教養学部という組織
の存在を永続的なものと想定すること自体の是非からして問題なのであろう。

しかし、教養学部が教養学部であるかぎりにおいて避けられないことがあるように思
われる。東京大学教養学部が掲げるリベラル・アーツという理念は、古代ギリシャまで
さかのぼれる歴史をもっている。このような理念が現代に生きているのは、それが不
変・不動であったためではなく、常に時代の要請に応じて再定義され更新されてきたた
めである。この作業は継続されなければならない。また、教育の責任が大きい部局で、
2年間で通過していく常に新しい学生を相手にする学部として、教養学部は学生の変化
に常に機敏に対応しなければならないという課題を背負っている。この二つのことを考
えただけでも、教養学部をはじめとする駒場は常に「走り続け」なければならないよう
に思われる。このような意味では、本書が中心的に取り上げたこの20年の歴史は決して
例外的な時代であったわけではなさそうである。

最後に、本書の刊行に尽力された義江彰夫委員長をはじめとする編集委員会の委員
と、刊行を引き受けてくださった東京大学出版会に感謝の意を表したい。

2001年11月3日

東京大学教養学部長 古田元夫

駒場 50 年史編集委員会委員一覧

学部長 古田元夫

評議員 小林康夫

委員長 義江彰夫

副委員長 三谷 博

委員 齋藤兆史 (言語情報科学)

中村雄祐 (超域文化科学)

相澤 隆 (地域文化研究)

丸山真人 (国際社会科学)

箸本春樹 (広域・生命環境科学)

藤垣裕子 (広域・広域システム科学)

廣野喜幸 (広域・相関基礎科学)

目 次



美術博物館の内部、手前の作品はマルセル・デュシャン「花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも」(通称「大ガラス」東京ヴァージョン)(撮影：鈴木昭夫)

はしがき	古田元夫
------	------

第I部 学部長・研究科長の回想

とりとめのない思い出	本間長世	3
学部長(室)時代の回想	小出昭一郎	8
学部長回顧	竹田 晃	12
As usual or unusual?	毛利秀雄	18
思い出すままに	青柳晃一	24
学部長時代の思い出	原田義也	29
あまり思い出したくない車の振動について	蓮實重彦	36
1995.2-1997.2	市村宗武	40
研究科長・学部長の日々——1997年2月～1999年2月	大森 彌	47
学部長時代の思い出——1999年2月～2001年2月	浅野攝郎	56

第II部 駒場の改革

大学院重点化

駒場という名のキマイラ	渡邊守章	65
大学院重点化と駒場の機構改革について	川口昭彦	72
「言語情報科学専攻」の立ち上げ——設立前夜から発足まで	山内久明	77
「超域」のできるまで	川本皓嗣	84
重点化改革に地域文化研究専攻はどう対処したか ——主任から見たヒストリーとストーリー	中村健二	88
国際社会科学専攻の大学院重点化を回顧する	岩田一政	93
駒場の大学院重点化が我々に気づかせたこと	菅原 正	100
広域システム科学の成立	杉本大一郎	108
大学院数理科学研究科の設立をめぐる	岡本和夫	114
アメリカ太平洋地域研究センターの沿革	遠藤泰生	120

前期課程の改革

前期課程教育カリキュラム改革について	川口昭彦	129
前期課程教育カリキュラム改革の評価	川口昭彦	136
前期課程カリキュラム改革	成田篤彦	143
五科体制	田邊裕	149
「学問論」の展開としての駒場の改革	平澤冷	154
外では「保守派」、内では「改革派」? ——人事をめぐる五科=教室体制と大学院重点化	古田元夫	161
理系前期課程新体制	下井守	166
教養学部前期課程の改革	松原望	169
駒場体育の50年	渡辺融・浅見俊雄	176

後期課程の改革

改革の止まらない教養学部の後期課程——教養学科の視点から	田邊裕	187
後期課程(文系)の改革	中井和夫	193
“教養学部的流れ”の中で——基礎科学科第2の前後譚	濱田隆士	198
教養学部短期交換留学プログラム AIKOM 設立の頃	高田康成	206
教養学部短期交換留学プログラム(AIKOM)の運営に携わって	木畑洋一	215
駒場図書館史	長尾龍一	221
教養学科図書室	田邊裕	231
駒場における情報処理教育——情報リテラシー教育の観点から	植田一博	235
三鷹国際学生宿舍の建設と駒場キャンパスの再整備計画	永野三郎	242

第III部 留学生と事務職員の駒場

留学生の駒場生活

駒場五十年の歴史	汪婉	253
駒場キャンパスと6ヶ月半の熱愛	金柄徹	259
駒場でのポジトロニウム研究	ナズリン・ザファー	265
駒場の思い出	姦玉明	268
私の駒場留学記	張寅性	270

「他なるもの」のなかで考える	トビアス・チャン	277
駒場の暖かい思い出	レナータ・ソヴィンスカ・三井	279

教官のコメント

地域文化研究初期の頃の外国人学生たち	小林善彦	281
大学院ゼミ参加者の過半を占める留学生たち	並木頼寿	286

事務職員の思い出

駒場 35 年のあれこれ	白庭昌治	292
駒場 4 年間の点景	渡森幸三	301
コンピュータ以前の教務課	梶 史郎	312
学生課の歴史をふり返る——発足から東大紛争まで	栃原寅雄	317
教養学部報——もののはじめ	栃原寅雄	325
有縁の知識に会うて	西田 朗	335

年表・付表

1 教養学部・総合文化研究科年表	343
2 教職員一覧	354
1) 教養学部定員表 [354]	
2) 歴代学部長 [354]	
3) 歴代評議員 [354]	
4) 名誉教授 [355]	
5) 元名誉教授 [357]	
6) 旧教職員 [358]	
7) 現任教職員 [376]	
8) 大学院と学部の組織 [391]	
3 年度別入学者・卒業者数等一覧	394
1) 教養学部 [394]	
2) 大学院総合文化研究科 [397]	
4 数字で見る総合文化研究科・数理科学研究科の現況	401

- 1) 敷地・建物面積 [401]
 - 2) 教養学部が現在に至るまでの経過 [402]
 - 3) 教職員数 [403]
 - 4) 在籍学生数 [403]
 - 5) 歳入歳出額最近5ヵ年の動き [404]
 - 6) 蔵書冊数 [405]
- 教養学部建物配置図 [408]
- 三鷹国際学生宿舎建物配置図 [409]